

実習報告（学校変革基盤実習）

特別支援学校の専門性を地域支援に活かすネットワークの構築にむけて —特別支援学校におけるセンター的機能の実践を通して—

馬場 はつみ（子ども支援探究コース 特別支援教育系）

【探究実習のテーマと設定の理由】

「特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）」（平成17年12月中央教育審議会）では、特別支援学校は特別支援教育の中核（センター的機能）を担うこと、特に小・中学校に在籍する障害のある児童生徒や学習上、生活上で困難さを有している児童生徒に対し、その教育的ニーズに応じた適切な教育を提供していくために、特別支援学校のもつ教育上高い専門性を生かし、積極的に支援していくことが求められている。そして、「特別支援教育の推進について（通知）」（平成19年文部科学省）では、特別支援学校において、これまで蓄積してきた専門的知識や技能を生かし、地域における特別支援教育のセンターとしての機能の充実を図ることとともに、特別支援学校は、在籍している幼児児童生徒のみならず、小・中学校等の通常学級に在籍している発達障害等のある児童生徒等の相談を受ける可能性も広がると考えられるため、より専門的な助言などが求められていることに留意し、特別支援学校教員のさらなる専門性の向上を図ることが求められている。

A 特別支援学校は、在籍する児童生徒の障害の状況が、肢体不自由のみの児童生徒から、知的障害や自閉症を伴うもの、医療的ケアが必要な重度・重複の児童生徒等幅が広く、個々に応じた指導・支援を行っていくためには、学習面、生活面、健康面等さまざまな面での知識や技能が求められる。そのため、A 特別支援学校での実習では、児童生徒の障害の状況に応じた教科指導、領域教科合わせた指導、自立活動の指導や自立活動の時間の指導などにおける教師に必要な知識や技能を、指導・支援の実践を通して学ぶことができると考える。加えて、専門性の向上の為の研究や研修会等の取り組み、教員間や他機関との連携、地域支援の実際についても学ぶことができると考える。

そのようなことから、探究実習のテーマを「特別支援学校の専門性を活かした支援について—肢体不自由特別支援学校の実践を通して専門性を知る—」とし、実習を通して、肢体不自由特別支援学校に求められている専門性とは何で、実践の中でどのように生かされているのか、また、専門性の向上の為に学校内でどのような取り組みがされているのかを把握し、そこから障害種を超えて特別支援教育に求められている知識や技能とは何であるのかを考えてきたい。

【探究実習の研究目標】

- (1) 自立活動の指導、摂食指導、教科等の指導など児童生徒の指導・支援を通して、肢体不自由児教育における教員の専門性について考察する。
- (2) 校内の専門性向上の為の研修や研究等の取り組みについて知る。
- (3) 児童生徒の指導・支援における教員間の連携や情報共有の仕方や福祉サービス、医療機関等他機関との連携の実際について知る。

【探究実習の概要】

実習校名称	A 特別支援学校
実習期間	2021年8月25日～2021年9月22日

実習内容	<ul style="list-style-type: none"> ・各学部の指導、支援体制について ・医療的ケアコーディネーターの役割 ・ICT利活用の実態、活用事例 ・個別の教育支援計画の作成と活用、合理的配慮について ・学校救急体制、災害時対応 ・福祉サービス等関係機関との連携 ・研究内容、現状と課題について ・特別支援教育コーディネーターの役割 <ul style="list-style-type: none"> ・医療的ケアの必要な児童生徒について ・自立活動の指導、研修会等の取り組み ・情報セキュリティについて ・摂食指導の現状と課題 ・進路先、進路状況について ・地域支援、校内支援について
------	--

【探究実習の成果と課題】

A 特別支援学校の実習では、(1) 肢体不自由児教育における教員の専門性について考察する。(2) 校内の専門性向上の取り組みについて知る。(3) 教員間や他機関との連携の実際について知る。という目標を設定した。(1) 教員の専門性に関しては、自立活動や教科指導等、実際の指導・支援場面から児童生徒の目線に立った、気持ちの汲み取りを大切にしたり関わり方や発達段階等を考慮した活動内容、教材・教具の工夫や提示、身体やコミュニケーションの能力にあったICT機器の使用、また、活動ごとの指導・支援の見直しや検討、課題意識を持った日々の実践のあり方について学ぶことができた。(2) 校内の専門性向上の取り組みでは、計画的に研修会や相談会を設定し、教員全体の専門性の向上を図るだけでなく、研修会等の運営をする中で経験豊富な教員から若手の教員への専門性の継承を行っていくという工夫がなされていた。また、児童生徒に関する各種シートを作成する中で、専門用語に触れ、児童生徒の実態を通して理解していくという実務の中で専門的な知識を得ていくという考え方を知ることができた。(3) 教員間や他機関との連携では、教員間で支援の方法や指導の流れを共有するためのサポートシートの活用や複数の目で児童生徒の実態を把握できるような支援体制の工夫もなされていた。他機関との連携では、特に児童生徒が放課後の活動の場として利用をしている福祉サービスとの連携が多く、その日活動の様子や体調等を短時間で効率よく情報共有がなされていた。情報を精選して伝えたり、連絡帳やメモサイズの情報共有のシートを用いたり、限られた時間で情報共有するための効率的な方法が用いられていた。また、A 特別支援学校では、医療的ケアを必要とする児童生徒のため、校内には看護師が常駐し医療的ケアにあたっている。医療的ケアコーディネーターを中心に、担任、保護者、看護師等支援者が互いの役割を理解し、尊重し合いながら支援に当たることができるよう環境整備・調整がなされていることを知ることができた。

A 特別支援学校では、児童生徒の障害の状態から、一対一の支援場面が主である。児童生徒の実態を一日通して把握し、小さな発信を敏感に受けとめながら関わっていくためには必要な支援体制である反面、教員が自分の関わりを客観的に評価し支援の見直しを図るという点では、他者視点からの意見を聞く場を意識して設けていく必要がある。そのため、A 特別支援学校では、特別支援教育コーディネーターや学部主事等級外教員が中心となり、その役割を果たしていた。教員一人一人が実践の中で試行錯誤し見いだしてきたことが、教員間で言語化され共有されたときに特別支援学校の専門性と言えるのではないかと感じた。実践について振り返り、その意図や根拠、効果等を言葉にしてやり取りをする場を意識的に設けていくことで、専門性の向上や継承につながっていくのではないかと感じた。

【引用・参考文献】

・中央教育審議会（2005）「特別支援教育を推進するための生徒の在り方について（答申）」

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1396568.htm

・文部科学省（2007）「参考資料 12：特別支援教育の推進について（通知）」

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1300904.htm